

平成14年は、午年であるからという訳ではないが、馬の付いての話題を提供します。

道内の有名牧場が閉鎖に追い込まれている。日本屈指の馬産地といえば、日高を思い出す人が多いのだろうが、朔東の道東地域もそれに劣らず馬産地である。

朔東はかつては一大馬産地として殷賑を極めた。十勝・釧路等の地に馬が入ってきたのは、『朔東から第52号』で述べた様似・猿留の山道が開削されて馬の通行が可能になって以降である。当初は南部馬を購入して駅通馬として利用した。52号で述べた道路開削に連携して交通の要衝に旅宿所（または通行屋）を設け、駅馬を備え交通の便に供した。蝦夷地における馬及び牛は全て官有で、駅通事務は、当初は官で、事後は請負人に託した。

北海道在来の所謂土産馬は、南部馬の退化したもので、粗食に耐え、寒さに強く、持久力があって長命なのが特徴といわれている、馬格は小柄だが、気候風土に適していたため広く活躍した。開拓使は、明治四年、種牡馬「流星栗毛」をはじめ馬を輸入して、種付けを行い増殖を図った。

北海道が一大馬産地になった背景は、二点あるものと考えられる。第一点は、明治政府による欧米型農牧畜政策の推進であり、他方は、帝国陸軍による馬政政策の推進である。

江戸時代にあつては、函館奉行の肝いりで、文化二年虻田・有珠に牧場を開いて、馬匹の繁殖がなされ、官有に供されるものを除き民に払い下げられた。馬は、拓殖上、交通上極めて有益であった為、有珠岳の噴火や大雪などの被害を受けながらも次第に増殖していった。安政元年には東蝦夷地で1600頭となった。安政年間には、全道で一万頭に達していたと言われている。原野の開墾にも馬は必須だったようだ。鹿追の神田日勝記念館にある日勝の絵でその状況を知ることが出来る。切り株の除去は大変な労力だ。また、農耕にも馬は重宝であった。畑を耕す為のプラウが発明された後は馬に引かせて耕した。能率が一気に上がったのだろう。

しかしながら、馬の飼育管理が粗放であったので、馬格が矮小となり弱体化したので、改良策が取られた。明治初年に存在していた牧場は、有珠・虻田および浦河の二ヶ所であったが、逐次に廃止され、明治初期には、幕藩時代の諸施設が存在しないという状況になった。北海道開拓使は、招聘したケプロンの勧告を容れ、官設の牧場を設ける（著名なものとしては、新冠牧場、真駒内牧場）と共に馬の改良に努力した。

道庁設置以降、全道に散在していた官有牧場の整理統合及び民間への払い下げが行われた。新冠牧場は、明治21年主馬寮の主管となり、新冠御料牧場と称した。

明治33(1900)年、陸軍省は、軍馬補充部釧路支部を創立し、翌年5月白糠村に開庁した。これが北海道における軍馬供給・育成体制の基礎が出来た。明治39年には馬政局官制が公布され、内閣直属の馬政局が馬匹の改良繁殖その他馬政一切を管掌することとなった。これは日清・日露の両戦役の経験から日本の軍馬の劣等性が認識されたからであった。その後、馬政局は陸軍大臣の管理するところとなった。明治34年の軍馬補充部釧路支部の白糠村開庁に引き続き、明治40年音別派出部、41年川上(標茶村)支部、45年足寄派出部などを増設し、朔東地域が一大馬産地になる基盤が出来上がった。43年には、音更村に十勝種馬牧場(置戸に北見分厨設置)が広大な面積で

開設された。本別の仙美里(今の北海道農業大学校)に軍馬補充部十勝支部、利別に出張所が設けられた。

足寄町には、九州大学の演習林があるが、これは軍馬補充部跡地 1900ha の一部を所管換えしたものである。

標茶町は、集治監が網走に移転した後は火が消えたようであったが、軍馬補充部川上支部が標茶に設けられると、一気に賑わいを取り戻し、終戦による軍馬補充部の解散までは、村の経済の中心的存在であり、村民生活と深く関わっており、正に軍馬補充部と共存共栄の関係にあった。この川上支部の面積は、3万町歩、釧路川を挟んで弟子屈や別海に広がる広大なものであった。

西春別に軍馬補充部根室支部の設置が決定されたのは、昭和 11 (1936) 年であり、38 年開庁式が行われたが、軍馬の必要性も低くなり、また戦況も悪化したこともあってか、昭和 19 年(1944) 終戦前に閉鎖された。西春別には当時の官舎等があるといわれているが・・・

白糠町は、明治 33 年の釧路支部設置に伴い、白糠町和天別分厩で働く牧夫が青森県出身の軍属から南部藩の「野馬捕り」をモデルに衣装や振り付けを創作した郷土芸能「白糠駒踊り」が有名だ。若駒が、春の野に放たれ、青草を食みながらたわむれ、やがて落日とともに厩舎に帰る一日を表現した踊りだそうだ。勇壮そして牧歌的な趣きが盛り込まれている。

軍馬は性質がおとなしく、力のある速い馬を目標に改良が加えられたが、荷役馬と輓馬を十勝で、乗馬と軽輓馬を日高が中心となって生産するよう計画された。これが今日日高地方に競走馬の一台生産地になった所以である。日清・日露の戦いを戦い、伝統的に対露防衛を主体に考えた陸軍である為、当時満州やシベリアの零下 30 度にもなる厳しい寒さにも耐えられる強い軍馬が求められた。これが為、寒冷でありながら、雪の少ない十勝、釧路、根室地方が軍馬の生産地として最適だったのであろう。

p s 豊頃に馬魂碑があると聞いたので、何れアップします。
(参考：百科事典、北海道史、各種HP等)